「次代を担う支援者養成研修」実施報告

８月１９日から１０月１５日にかけて当センターで「次代を担う支援者養成研修」を開催し、３５名が受講されました。

本研修実施にあたって

本研修を実現できたのは、悩みがあってもだれにも相談することができず、帰る場所さえ見失ってしまった子ども・若者たちを支援している、本研修の講師をお引き受けいただきました団体様の圧倒的な熱意によるものです。

不登校・ひきこもり支援を目的とするアウトリーチ研修は国を始め他県でも行われているところもあります。しかし、４団体が自主的に講演及び実地研修を協働して実施する事例は確認できず、実地研修だけでなく講演も実践に基づいた非常に貴重な機会になっていると考えています。これだけ実践に基づいた研修は他に類を見ないものになっていると自負しております。

困難を抱える若者の増加が課題であると同時に、その支援者の養成も社会的課題とされています。

社会教育では、社会課題や地域課題を市民の学習により、市民の力で解決していく、住民自治の基盤を形成していくことを目指しています。

事実をつかもうとする「学習」と、自らの地域生活を創り出していく「実践」とを統一する試みを行うことが社会教育です。そして、社会教育的アプローチによる「集う・学ぶ・結ぶ」ことにより、励ましあう関係を作り、より一層自覚的に、主体的に活動へと足を踏み出すことができると考えています。

子ども・若者の支援にかかわることを目指す参加者の皆様方が、困難を抱える子ども・若者への支援に関する理解を深めるとともに当事者性を高めて、将来の支援者として、気づき・つながり・寄り添い・信頼関係を築く実践力の向上を図り、ウェルビーイングの実現につながるものと考えています。

そして、少しでも子ども・若者たちの未来が明るくなってほしいと願っています。

愛知県生涯学習推進センター　センター長　小杉正樹

参加者　講　　義　１日目　３３名、２日目　３１名
　　実地研修　１８名　　全体交流会　２９名

研修１
「アウトリーチの価値と倫理」
　全国こども福祉センター理事長 中京学院大学専任講師 荒井和樹　氏
【内容】
　「アウトリーチとは何か」の理解を深めるため、不登校やひきこもりは悪いことか、 家庭訪問すれば解決するのか問題提起した。

次に、「アウトリーチの方法」として、スキルを紹介。視線や動作、姿勢や態度、非言語 で交流を図る【喚起スキル】。存在をあるがままに受け止める、押し付けない【臨在スキル】。子ども食堂・学習支援 など与えられる経験とケアの担い手として活動する経験は大きく異なる。立場を入れ替えることで、意思決定を支え、コミュニケーションを促進【主客転換スキル】など。

最後に、「アウトリーチの倫理」として、介入の側面が強いアウトリーチは、法や制度に則って、支援を押しつけてしまうことがある。受容することで自己決定の尊重・信頼関係の構築がはかられる。人間関係を深めることが幸福感に繋がる。

【参加者の声】

・現場での支援の現実を通して具体的に説明していただき大変良かった。疑問に思っていたことも納得することができた。

・福祉を学んでいる身として、専門機関ありきでの相談援助を学ぶことが多い中で、アウトリーチの実践のお話と、その価値について学ぶことができたのが良かったです。

・公的支援の枠組みから除外されてしまう方々のかかわり方について知れて大変勉強になった。

・講義を受けて自分自身の価値観が変わりました。何らかの形でサポートさせていただく機会があればいいと思います。

・子どもたちを無条件に支援の対象として決めつけず、仲間として迎え入れて交流する活動は素晴らしいと感じました。援助機関としての関わりに限界があり、無理に助け出そう、上から目線になりがちな接触がいかに相手に響かないか、弱者を弱者のまま無理に変えようとせず、そのまま寄り添うことの大切さを痛感しました。

・子どもたちに支援者が支援する、という態勢がどうしても抜けない。そのとおりだと気づかされました。子どもたち自身に、役割を与えて子どもたちを支えるエンパワメント、自分たちで動く主体性の重要性に気づかされました。

研修２

「若年女性を取り巻く実態

10 代 20 代の生きづらさを抱えている女性を対象にした居場所づくりから見えてきたこと」

特定非営利活動法人ひだまりの丘　meguruhouse 代表　久野　恵雅 氏

【内容】

若年者は、特に揺らぎが大きく不安定であるとともに経済的自立・精神的自立を迫られる時期でもある。このことから、安心・継続的な居場所かつ安心・継続的な関係性の伴走者が必要である。

女性も、居場所がなかったり、安心できるつながりがなかったりして、孤独感を抱え、人間関係不調を伴う、性被害・性トラブルなどのリスクも抱えている。

SOS も見えなくなっている。子どもたちはリストカットやオーバードーズ、パパ活、望まぬ風俗（リスクの高い性行為）、家出など言葉以外で表現するため、問題行動なのか SOS なのかわかりにくい。このことが、困難さを潜在化させ、つながりの希薄さから、SOS に気が付く存在がおらず、困りごとを一人で抱えてしまい、大きな困りごとに発展し、孤独・孤立がさらに深まることになっている。

私たち一人ひとりができることは、感度を上げてアンテナを張ること、「助けて」と言ってもらえる「人」になること、依存先を増やすこと、支援者も「助けて」と言えることである。

【参加者の声】
・居場所が複数あることの重要性に気づけた。
・実際にどのような悩みがあるのかを知ることができたと同時に、リストカットなどの問題行動が彼女たちの生きるために必要なことだという視点も大切だと気づくことができた。
・アンケート等の紹介など生の声が聴けて現状がよくわかってよかったです。簡単ではないですが、出来ることから行動に移さなければと感じました。
・地域の居場所が減っている・・・確かに思いました。自分達が出来ることはないか考えさせられました。
・長期的支援についての必要性。「助けて」と言ってもらえる「人」になりたいです。支援者が「助けて」といえることも重要であることを気づかされました。
・「傍から見て危険でも頭ごなしに否定するのではなく、本人の気持ちを考えることで、話せる大人と見てもらえて解決につながりやすい、という話があったことが印象的でした。
・私は、まわりの目を気にすることが多く、それ中心に生活がまわっています。自分の本当の気持ちを打ち明ければ否定されるかも、友人じゃなくなってしまうかもしれない恐怖感があった。自分と同じ思いの女性がいることを講義で知れて、より若者世代を支えたいと思うようになりました。

研修３
「子どもたちに寄り添う」、「社会的自立」、「対象者を取り巻く人間関係にも踏み込んだアプローチ」について
NPO 法人陽和　　理事長　渋谷 幸靖　氏
【内容】
引きこもり、発達障がい、不登校の子ども達、少年院や鑑別所を出た少年達に寄り添っている。様々な背景の中で育ち、居場所がなく、否定ばかりされ、社会の枠から外れてしまった子ども達の可能性の蓋を開けてあげ、どんな子でも「絶対にできる」と信じながら子ども達に寄り添う活動を続けている。
「陽和」のスローガンは「どの子も大切に」。
困難を抱えた子供は被害者性を有し、心の防衛反応として認知の歪みを抱えている場合がある。そのため、心のカギを開けることが重要であり、本音で話せる関係を築いて寄り添うことが肝要である。子どもの価値観で寄り添い、相手の場所と同じ場所にたつことが大切である。
自立とは、人に頼ることができること。依存先を増やすこと、依存できる社会資源が選択できることが必要である。
【参加者の声】
・自立の意味を「人に頼ることができる人」という説明は大きな気付きでした。
・非行少年のイメージが変わった。昔と今の非行少年はちがうし、SOS を求めている子どもたちはたくさんいると知った。
・寄り添うということはどういうことか？本人のそうならざるを得なかった理由（家庭環境や発達の問題など）を理解し、親子関係からたどり、どんな状態でも受け入れられる、味方になれる大人が一人でも増えるといいなぁと思いました。そばに添うということですね。

・子どもの自死や虐待が増える社会で「自分の価値が持てるように」自分がその中の一人でつながり続けたいと思いました。
・会いたい大人になるということや自立とは依存先を増やすこと、育つ環境・親子関係の影響の大きさなどが印象的でした。
・「穴に自分が入り、ぬかるみに足を入れ、そこまで降りて一緒に考えるのだ。」特に「落ちてゆくのにもつきあう」はなかなか自分が思っていても言葉にできなかったです。「きれい事」とか「カッコ良い事」とか言う人に、「それでも私は、つきあうから」と言えそうな気がします。

研修４
「アウトリーチという名の異文化交流」「社会資源の活用の難しさとその対応策について」
　一般社団法人　愛知 PFS 協会　代表理事　星野　智生　氏
【内容】
　支援現場における失敗の多くは、「あなたのために…」という名目のもとで、まだ何も協働的関係ができていない段階で、支援者が対象の家庭や子どもに対して、救済者幻想にとらわれて個人的な価値観や信念を押しつけることによって、子どもが抱く他者や社会に対する不信や警戒心を一層強くしてしまうことにあると言える。まずは支援者が家庭や子どもの価値観・信念・家庭文化を理解しようとすることから始まり、その子に合わせた方法を一緒に考えていくことに専念していく。自分たちを支援者や社会の価値観に合わせず、「その子にとっての最善の方法は何か？」という問いに向き合い、よりそい続けることで信頼関係は大きくなり、多少の言動の不一致によってお互いの信頼関係が崩れることなどないという「絆」が構築されていく。これが、「協働的関係（信頼関係）」である。
　子どもには「前を向いて歩んでいける力」がある。私たち大人が可能性を信じてあげましょう。
【参加者の声】
・支援とは、特別に何かをするということではないことと、本人がのぞんでいること（真意）に対して何をすべきかを見極めることかな、と思いました。
・異文化交流は刺激になります。オープンダイアローグのようで、当事者参加型共創支援、とても大賛成です。今まであったようで無かった。でもこれでないとダメでしょうと思いました。
・「死にたい」という言葉には本当に伝えたいメッセージが隠れていることを知り、それに気づき本当に伝えたいことが何か考えることが大切なのだと学びました。
・専門性より関係性を重視していく姿勢は本当に大切です。「子どものために」という気持ちは同じであるので、つながりあっていけばいいと思う。「専門じゃないから」と言っている場合ではない。
・これまで「支援」という立場で考えていましたが、子どもたちの思いを肯定し、ただ何もしゃべらずにそばにいるだけで良いということにとても驚きました。
・一人ひとりの可能性を信じる!!私も信じます!!
・「支援に正解はない」、「子どもの価値観を理解できないこともあるかと思うが、理解しようとして下さい」という言葉が印象に強く残りました。

ワークショップ

・自己紹介

・講演を聞いて学んだことや気づきを参加者皆さんで共有

【参加者の声】

・年齢や立場の違う人達と自由にお話ができて、それも皆さん大変いろいろ考えていて、勉強になりました。とにかく考えることは大事だなぁと思いました。

・自分と近い考えや、気づいていなかったことに気づけたことなどがあり、とても良い時間になりました。色んな立場からの意見を聞けたことも貴重な経験になったと思います。

・年代がある中でそれぞれの立場から異なる話をきけて良かった。また講義で飲み込み切れなかったことを深く理解するのに役立った。

・それぞれの受講のきっかけ、目的は異なるものの、「よりそう」ことの難しさや、本当によりそうことって何？と気づきや共感する部分が同じだと感じることが出来、よかったです。

・自分の心のもやもやや悩みを打ち明けることができ、人生の先輩方から貴重なアドバイスをいただくことができ、本当に良かったです。

実地研修

　講師の各団体の活動に参加していただきました。複数の団体の活動に参加された方も多くいらっしゃいました。

全体交流会

　実地研修参加者による実地研修の感想や今後の活動についてお話しいただき、各団体の講師及び県関係課（地域福祉課・あいちの学び推進課）担当職員からもコメントをいただきながら、参加者同士の交流をしました。

修了証

　すべての研修に参加された１５名に修了証を授与しました。

【修了書授与者の参加報告】（一部抜粋）

・過去は変えられないが、斜めの関係(保護者でなく、先生でもない)として同じ目線で話を聞き、小さなことでも褒め、最後に少し方向性を与えてみる。居心地が良すぎてもいけないことを学びました。

　今後は、自分の人生経験を活かしつつ、微力ですが、困っている人に寄り添い、サードプレースになれたらと思います。（M）

・不登校の子どもたちが増加していると聞きます。私はこの事が 20 年ぐらい前から気になっています。そして、学校外の居場所作りを整えることと並行して、子どもたちにとって、学校が楽しい場

所、行きたい場所になり得るよう、子育ての先輩ママとして、できることはないものかと、自身の視野を広げて探していきたいと思っています。（H）

・現在放課後等デイサービスの事業所に勤めており、発達障がい児や不登校の利用者と接することがあるなかで、社会や制度がまだまだ追いついていないと感じていました。
　各方面の法人からいろいろな角度で情報や学びが得られ、大変貴重な経験ができ、感謝しています。
　私は、PFS 協会様の実地研修で実際の現場（家庭訪問・居場所の見学、参加）に出向くことにより、寄り添い姿勢の支援の有効性を実感することができた。それぞれ時間の最後には、少し心を開いてくれたのがわかり、こうした寄り添いの支援こそが先につながる支援のベースになると思った。現在の勤務で、こうした民間の支援と学校側などの行政の支援がまだまだシンクロできていないと思っているので、さらなる協力体制をつくる必要があると思うし、こうした連携ができれば、利用者様にとってますます有益だと考える。（S）

・福祉の歴史から始まりアウトリーチ支援、女性対象の支援、子どもの学びの場所など様々な支援の存在を知り考えることも多い充実した時間でした。子どもの最善の利益を考えながら、子どもに信頼してもらえる「第三の大人」になりたいと思いましたし、斜めの関係を大切にしたいと思いました。子どもの現状を知り、大人がどのように考えて行動していくのか、子どもに寄り添いながら学び続けていきたいと思います。
　活動に参加させていただき、子どもたちから学んでいこうと思います。また、地域で気軽に子どもの声が聴ける場所作りも考えてみようと思いました。アンテナをはって、子どもの現状を知りながら学び続けてみようと思います。
　アドボケイトにもなって小さな声の代弁者にもなるつもりです。子ども側の大人であり続けたいと思います。（M）

・今回の 4 人の講師に共通するのは、ひたすら相手の立場に立って考えようとしている点でした。クライエントをエンパワメントする、クライエントの尊厳を奪わない、という社会福祉の基礎的な視点から考えても非常に重要なことだと感じました。
　全国こども福祉センターの実地研修で学んだのは、上記よりもさらに進んだ支援の在り方です。「被支援者の立場に立って支援を行う」のではなく、そもそも支援者と被支援者の区別を無くすというものです。これはクライエントの尊厳を奪わない新しい支援の在り方であり、今後もこのような活動が必要だと感じました。
　これらを学んだ後に全体交流会で他の方々の感想を聞いて感じたのは、相手の立場に立ち対等に関わることの難しさです。言葉の綾ではありますが、傍に居て“あげる”、話を聞いて“あげる”、といった言葉が感想の中に度々あり、支援者の立場を捉え直すことの難しさを感じました。もし自分の目の前に支援者を名乗る人が現れて「話を聞いてあげる」という態度で話しかけられたと想像すると、それは私を被支援者の立場に押し込める上から目線の態度に感じられて少し嫌な気持ちになります。しかし、この気持ちが想像できたとしてもついロから「やってあげる」という言葉が出てしまうものだとも私自身感じており、私を含め支援に携わる人々は今後この課題に向き合い続けていく必要があると感じました。（O）